

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 12 日現在

機関番号：32682

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010 ～ 2011

課題番号：22820064

研究課題名（和文） 後朱雀朝・後三条朝の歴史叙述と『源氏物語』の研究

研究課題名（英文） The historical description of the Gosuzaku era & the Gosanjou era  
and the research of “the tale of Genji”

研究代表者

高橋 麻織 (TAKAHASHI MAORI)

明治大学・文学部・助教

研究者番号：80588781

研究成果の概要（和文）：本研究は、『源氏物語』成立期(1008)以降の史実を媒介として、『源氏物語』の政治世界を解釈し物語意義を考えるものであり、これは、従来の『源氏物語』准拠論から脱却する試みである。これまでの准拠論は、延喜天曆期を中心とした『源氏物語』成立期以前の歴史的事例を『源氏物語』に引き当てて考察されてきた。しかし、『河海抄』が後朱雀朝の史実を挙げるように、『源氏物語』には先例のない出来事が描かれ、成立期から院政期までの間に実現する現象が見出せる。本研究では、『源氏物語』成立期以降の歴史のうち、特に後朱雀朝・後三条朝(1036-1073)を取り上げ、『源氏物語』と物語成立期以降の史実・歴史叙述を比較検討することで、『源氏物語』に描かれる政治や後宮のあり方の解明とその意義考察を行うことを目的とした。

研究成果としては、以下の二点がある。まず、『河海抄』の准拠関係の指摘のうち、『源氏物語』成立期以降の史実をリストアップした。これは、当研究の目的である「後朱雀朝・後三条朝」を含む成立期から院政期までの史実に該当する。これにより、『河海抄』は『源氏物語』の成立を明らかにする一方、『源氏物語』の読解に迫る注釈態度も合わせ持つことがわかった。これにより、従来の准拠論の見方である「作者の方法」から「読者の方法」へと視点を転換させる必要性が見出せる。次に、従来『河海抄』など古注釈研究に収束していたこれらの調査を、歴史物語との関連性を踏まえ『源氏物語』読解へと還元できたことである。具体的には、平安時代の育成儀礼である「産養」について、古注釈の指摘を踏まえつつ、それに『栄花物語』の叙述および、延喜・天曆期から院政期までの史実を広く検証することで『源氏物語』の描く産養の記述には史実からの脱却が見られること、そしてその物語意義に迫ることができた。これは、従来の准拠研究のように『源氏物語』成立期以前までの史実にのみ固執していた場合は結論の出ない問題であり、当研究の目的と方法の重要性が明らかとなった成果の一つである。

研究成果の概要（英文）：In this research the political world is interpreted of “the tale of Genji” through the history after the time when “the tale of Genji” was written and is considered the significance of the tale. This means to free ourselves from the traditional Junkyo-Ron of “the tale of Genji”.

Junkyo-Ron used to be what we measure “the tale of Genji” with the historical events and characters before “the tale of Genji”, such as the Engi era and the Tenryaku era, until now.

However, as the historical facts of the “Gosuzaku era are mentioned in “Kakai-shou we can find them realize, although unprecedented matters are written in “the tale of Genji”.

In this report I pick up the Gosuzaku era & the Gosanjou era(1036-1073) particularly, and I aim at solving and considering the way of politics and the world of an empress and other wives of an emperor in “the tale of Genji” by comparing “the tale of Genji” with historical facts and writings.

This research brings two good points to us. First I picked up historical facts after the time “the tale of Genji” was written out of indications in “Kakai-shou”. It comes under between the time “the tale of Genji” was written including ‘the Gosuzaku era & the Gosanjou era and the Insei period. As a result of it, I have found that ‘Kakai-shou’ says both how “the tale of Genji” was produced and the way to read it. Therefore it is necessary for us to change the traicitional views of Junkyo-Ron, ‘writer’s way’, into ‘reader’s way’.

I could even return to the interpretation of “the tale of Genji” according to historical tales in this research though we were studying only Kochushaku such as ‘Kakai-shou’.

Concretely I made actual ‘Ubuyashinai’ in the Heian Period evident by the research of historical facts between the Daigo era and the Toba era, but description of ‘Ubuyashinai’ in “the tale of Genji” deviates historical facts, and I consider the significance of the tale.

If we stick to only historical facts before the time “the tale of Genji” was written like traditional Junkyo-studying, it is impossible to form a conclusion. It shows that the aim and the way of this research are important.

#### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,010,000	303,000	1,313,000
2011年度	920,000	276,000	1,196,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,930,000	579,000	2,509,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：『源氏物語』・准拠論

#### 1. 研究開始当初の背景

『源氏物語』研究は近年、細分化・専門化が進み、西洋の文学理論を援用した方法など多岐に渡る。しかし、『源氏物語』の物語世界を理解するには、当時の貴族たちの生活・習慣・文化を踏まえ、平安時代の制度史や政治史など歴史的背景を広く把握する必要がある。『源氏物語』を単なる恋愛物語としてではなく、平安時代の現実社会に即し政治的な視点から読み解くには、「歴史」を知ることが重要となる。『源氏物語』と「歴史」と

の関わりについての研究は、所謂「准拠論」と呼ばれる。しかし、「准拠」という用語の使い方は論者によって異なる上、対象とする「歴史」も延喜天曆期に限定されず、嵯峨朝まで遡る場合や、物語成立期の一条朝を取り込むこともある。また、「准拠論」を標榜せず『源氏物語』と「歴史」との関連性を取り扱う研究成果は、近年多く発表されている。その他、平安時代の制度や文化、あるいは儀礼や習俗など、歴史学との連携によって『源氏物語』に描かれる事柄を理解しようとする

研究もある。

## 2. 研究の目的

このような近年の研究動向に対し、本研究は、『源氏物語』成立期(1008)以降の史実を媒介として、『源氏物語』の政治世界を解釈し物語意義を考察することを目的とする。これは、従来の『源氏物語』准拠論から脱却する試みである。これまでは、延喜天曆期(897-967)を中心とした『源氏物語』成立期以前の歴史的事例を『源氏物語』に引き当てて考察されてきた。しかし、『河海抄』が後朱雀朝(1036-1045)の史実を挙げるように、『源氏物語』には先例のない出来事が描かれ、成立期(1008)から院政期(1068-)までの間に実現する現象が見出せる。本研究では、『源氏物語』成立期以降の歴史のうち、特に後朱雀朝・後三条朝(1036-1073)を取り上げる。『源氏物語』と物語成立期以降の史実・歴史叙述を比較検討することで、『源氏物語』に描かれる政治や後宮のあり方の解明とその意義考察を行った。

## 3. 研究の方法

本研究は、①から⑤まで、以下のような5つの課題を掲げて進めた。

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>①古注釈の指摘する『源氏物語』成立期以降(1008-)の史実の調査</li><li>②後朱雀朝・後三条朝(1036-1073)の史実の調査と『源氏物語』解釈の検討</li><li>③平安時代における制度史・文化史の変遷と『源氏物語』解釈の検討</li><li>④『栄花物語』における後朱雀朝・後三条朝の叙述と『源氏物語』の検討</li><li>⑤『大鏡』『今鏡』における後朱雀朝・後三条朝の記述と『源氏物語』の検討</li></ol> |
|---|

①②③は、後朱雀朝・後三条朝の歴史叙述と『源氏物語』との関連性の検討である。まず、『河海抄』など古注釈に見える『源氏物語』成立以降の史実をリストアップし、歴史史料に基づき検討した上で、それを援用して『源氏物語』に描かれる政治や後宮制度の解明にあたった。④⑤は歴史物語と『源氏物語』との比較である。おもに『栄花物語』『大鏡』『今鏡』を取り上げ、そこに見える後朱雀朝・後三条朝周辺の歴史叙述について考察した。『源氏物語』の叙述方法や表現といった表層だけでなく、物語の歴史背景など深層に迫り、『源氏物語』の政治構造を分析する。平成22年度は課題①②③、つまり『河海抄』の悉皆調査と史実を媒介とした『源氏物語』解釈を行い、平成23年度は課題④⑤、つまり歴史物語と『源氏物語』の関連性にあたるというような形で、本研究を進めた。

## 4. 研究成果

研究成果は、以下の二点である。まず、『河海抄』における准拠関係の注釈のうち、『源氏物語』成立期以降の史実に関わるそれを全てリストアップできたことである。これは、本研究の目的である「後朱雀朝・後三条朝」を含む成立期から院政期までの史実に該当する。この調査により、『河海抄』の注釈態度は『源氏物語』の成立を明らかにする一方、『源氏物語』の読解に迫るという視点をも合わせ持つことが証明できる。そして、従来の准拠論の見方である「作者の方法」から「読者の方法」へと視点を転換させる必要性が見出せるのである。また、従来『河海抄』など古注釈研究に収束していたこれらの調査・検証を、歴史物語との関連性を踏まえることで『源氏物語』読解へと還元できた。具体的には、特に平安時代の生育儀礼である「産養」について調査した。古注釈の指摘を踏まえつつ、醍醐朝から鳥羽朝までの史実を検証することで、『源氏物語』の描く産養の記述に史実からの脱却が見られることを指摘し、その物語意義に迫った。これは、従来の准拠研究のように『源氏物語』成立期以前までの史実のみ固執していた場合は結論の出ない問題であり、当研究の目的と方法の重要性が明らかとなった成果の一つである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 高橋麻織 「『源氏物語』准拠論の成立と展開—冷泉朝における光源氏の政治—」 『Journal of Korean Culture』第15号、査読無、2010、pp34-57、
- ② 高橋麻織 「『源氏物語』皇統の行方—匂宮への皇位継承をめぐる—」、吉村武彦編『交響する古代』、東京堂出版、査読無、2011、pp394-413、
- ③ 高橋麻織 「『栄花物語』『大鏡』における〈源氏〉の位相—『源氏物語』と創造された「歴史」—」高橋亨編『〈紫式部〉と王朝文芸の表現史』、森話社、査読無、2012、pp345-356、
- ④ 高橋麻織 「「帝の御妻をも過つたぐひ」—『源氏物語』から歴史物語へ」日向一雅編『源氏物語の礎』、青簡社、査読無 2012、pp107-126、

[学会発表] (計5件)

- ① 高橋麻織 「『源氏物語』匂宮への皇位継承—相対化される冷泉院—」古代文学研究会大会、於伊勢市千の杜、2010、

- ② 高橋麻織「『大鏡』における〈氏〉意識—〈安和の変〉を起点として—」、国際学術会議、於韓国ソウル高麗大学校、2010、
- ③ 高橋麻織「『源氏物語』皇統の行方—二人の若宮誕生と王権をめぐって—」国際シンポジウム『交響する古代』、於明治大学、2010、
- ④ 高橋麻織「『源氏物語』の「虚×実」—「帝の御妻をも過つたぐひ」—」物語研究会大会、於京都市京の宿洛兆、2011、
- ⑤ 高橋麻織「『源氏物語』に描かれる産養の主権者—七日目の天皇主催の産養をめぐって—」中古文学会秋季大会、於愛知淑徳大学、2011、

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 麻織 (TAKAHASHI MAORI)  
明治大学・文学部・助教  
研究者番号：80588781

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者  
( )

研究者番号：